

1月12日 マタイによる福音書3章13～17節

「これはわたしの愛する子」

今日の聖書箇所には、洗礼者ヨハネによるイエス様の洗礼の出来事が記されています。ここで、ヨハネはイエス様に洗礼を授けることをためらっていました。それは、イエス様に「罪がない」、悔い改めるべき罪が何一つないからです。それを理解することができた時点で、洗礼者ヨハネにはある種の特別な賜物が与えられていたのだと思います。少なくとも、多くの人々がイエス様のことを罪びとであるとし、十字架へと押しやったのとは対照的に、イエス様が罪に対して汚れない存在であることをヨハネは理解することが出来ていました。

だからこそ、ここでイエス様に施した洗礼は、それまでヨハネが人々に行っていたものと、本質的には全く異なるもの、ということになります。全く罪がないイエス様が受けた悔い改めの洗礼は、「自分以外の人物の罪」を悔い改める、全人類の罪の赦しのために行われたものでした。だからこそ、イエス様はその洗礼を「そのまま行ってくれ。それが正しいことなのだ」とヨハネに語り掛けていたのです。

そこで起きたいくつもの現象は、イエス様が神の子でありメシアであることを神様が証しする現象でありました。「そのとき、天がイエスに向かって開いた」とあるように、目に見える形でイエス様の業を神様が祝福している様子が示されます。また、「神の霊」が鳩のように降り、「これはわたしの愛する子」と言う声によって、イエス様が確かに神様の子であることが公に示されました。神の子であり、神のしもべとして与えられたイエス・キリストの公の生涯の始まりが、洗礼者ヨハネを通じて示されたのです。

一般的にキリスト教の信仰と洗礼は切り離すことが出来ません。イエス様を主であると告白し、神様の御心を知りその中で生きるように生き方を改める必要があります。例えばルカによる福音書7章では、イエス様の言葉ではなく地の文の中ですが、ファリサイ派の人々が「洗礼者ヨハネから洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ」と書かれています。罪を悔い改めて洗礼を受けることが神様の望みであり、イエス様の言葉を信じイエス様に従うことによって、私たちは復活や救いに与ることが出来るのです。だからこそ、私たちは多くの人に洗礼を受けてもらいたいと思っていますし、誰かが洗礼を受けると言えば、その事を心の底から喜ぶのです。そのように、私たちが人生で一度しか経験しない洗礼というものは、自分のこととして体験するのは一度きりかもしれませんが、「誰かがこの教会で洗礼を受ける」という経験を通して、日々の聖餐式と同じように、「私たちも同じように罪が赦されているんだ」と思い起こすことが出来る、教会の大切な業なのです。

私たちは、このように洗礼を受けることの、神様の御心の中で生きることの恵み深さを見つめ直すことで、この素晴らしい交わりに加わる人がいるのであれば、それを心の底から祝福することが出来ます。洗礼を受けて、「これはわたしの愛する子」を神様に呼ばれたイエス様と同じように、私たちもまた、「これはわたしの愛する子」と神様に呼びかけられ、愛を注がれているのです。罪から解き放たれて、自由に誰かを愛することが、神様の業を共に行うことが私たちにはゆるされているのです。その喜びと希望を胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めて行きましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書 3 章 13～17 節

- 13:その時、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼(バプテスマ)を受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどませようとして言った。「私こそ、あなたから洗礼(バプテスマ)を受けるべきなのに、あなたが、私のところに来られたのですか。」しかし、イエスはお答えになった。「今はそうさせてもらいたい。すべてを正しく行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスは洗礼(バプテスマ)を受けると、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来るのを御覧になった。そして、「これは私の愛する子、私の心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

マタイによる福音書 10 章 34～39 節

「私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。私は敵対させるために来たからである。人をその父に 娘を母に 嫁をしゅうとめに。こうして、家族の者が敵となる。私よりも父や母を愛する者は、私にふさわしくない。私よりも息子や娘を愛する者も、私にふさわしくない。また、自分の十字架を取って私に従わない者は、私にふさわしくない。自分の命を得る者は、それを失い、私のために命を失う者は、それを得るのである。」